

# THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 71

2014年11月

## Special to the Newsletter

### 歴史的文脈と統合的視野

山倉 明弘

#### 逆風

天理大学は来年創立90周年を迎える。その前身である天理外国語学校が設立された1925年と言えば、帝国日本が1910年に韓国を併合して朝鮮語・韓国語の使用を禁止していた時代であり、「満州」へ勢力圏の拡大を狙って帝国陸軍関東軍が起こした満州事変の6年前である。そのような時代に、天理外国語学校は近隣諸国、すなわちアジア諸国の言語を中心に「支那語部、蒙古語部、馬來語部、印度語部、英語部、露語部、佛語部、獨語部、伊語部ノ十部」を置き、また「當分ノ内朝鮮語部ヲ置ク」[『天理大学五十年史』59頁]とした。「朝鮮語部」だけ「當分ノ内」設置と但し書きを付けたのは、当時日本の植民地となっていた朝鮮がすでに外国ではなくなっていたという当局の見解のために容易に認可が下りなかったことへの対策であった。すなわち、天理大学の前身校は、朝鮮語教育に逆風が吹く中で創意工夫を凝らして朝鮮語部をはじめとする計11言語部を設け、グローバルな視点で教育を行うことから出発したのである。

帝国日本の植民地朝鮮支配に関しては、日本本国政府や朝鮮統監府・朝鮮総督府などの為政者側の研究に加えて、植民地支配下における居留民（在植民地日本人）の役割に焦点を当てた研究が進んでいる。そうした研究者の一人、ジュン・ウチダによると、1876年から1945年の間、様々な日本人一兵士、官吏、商人、行商人、売春婦、ジャーナリスト、教師、大陸浪人―が朝鮮に出かけて行ったという。これらの人々は、「朝鮮半島で心機一転して新しい人生を始める一方で、帝国建設にも一役買うことになった。ほとんどの移住者にとって自分の利益が第一で国益はあくまで二次的ではあったけれども、彼らの平凡で日常的な営みと国家の野望とは分かちがたく結びついていたのである」[Jun Uchida, *Brokers of Empire: Japanese Settler Colonization in Korea, 1876-1945* (Cambridge and London: Harvard University Asia Center, 2011), 3.]

天理教は、「天保九年（一八三八）十月に立教して以来凡そ百七年間、昭和二十年（一九四五）の終戦に至るまで国家権力によって、弾圧乃至時には撲滅されかねない歴史をたどって来ている」[森井敏晴『天理教の海外伝道 世界だすけ―その伝道と展開―』善本社、平成20年、38頁]。こうした中で天理教信者が、国家の弾圧を受けながら、時には朝鮮総督府により朝鮮からの追放という処分を受けながら、朝鮮において朝鮮人布教に務めたことが少なくとも一部の近現代史研究者に知られている。たとえば、東西大学校大学院日本地域学科教授の李元範<sup>イウォンボン</sup>は、「韓国における天理教運動は、日本の韓国に対する独占的な支配が確立される前に、すでにその布教活動の基礎作りが出来上がって」

おり、「しかもそれは、日本官憲の後押しによってではなく、その反対に、日本官憲の弾圧のなかでのことだったのである」と論じている。朝鮮の居留民たちは、当時の日本国民が持っていた「文明国家としての誇りと、その裏返しの韓国に対する蔑視が国民意識の通念的な部分を形づくるようになっていた」けれども、「韓国で活動する多くの〔天理教〕布教者たちは、(中略)韓国社会への天理教の伝播が成功するためには、下流社会の相互扶助の精神に着目すべきだとし、そのなかでの彼らの「一家の中樞」である婦人たちへの布教を奨励していた。このように彼らは、都会よりも農村、上流よりも下流、男性よりも女性を布教対象とせよと奨励しているわけである」と天理教の「谷底布教」を説明している。〔李元範「近代日韓関係と天理教運動」、柳炳徳、安丸良夫、鄭鎮弘、島園進編『宗教から東アジアの近代を問う―日韓の対話を通して―』、ベリかん社、20002年、206, 211, 212〕

たぶん、こうした人間対人間の付き合いを通した布教が成果を挙げていたことが、戦後韓国において天理教活動が復活することにつながったと思われる。1945年、敗戦により天理教布教師は朝鮮半島から引き揚げ、天理教の「布教管理所」および「教義講習所」は廃止された。しかし、1963年には天理教は、財団法人「大韓天理教」として韓国政府より公認され、1975年には、「朝鮮布教管理所」を「韓国伝道庁」と改称し開設している〔森井前掲書 833〕。天理教の朝鮮布教と信仰は戦前・戦中は逆風の中で行われ、そして戦後にその地に復活したのである。

国家の弾圧という逆風は遠い昔となったが、現在日本の大学には18歳人口の急減という逆風が吹いている。こうした中、天理大学は体育学部内に設置する大学院研究科と共に、国際学部外国語学科内にあらたにスペイン語・ブラジルポルトガル語専攻を創立90周年の来年に設ける。そして、この新専攻の専任予定者はアメリカス学会現会長と前会長を含め全員がアメリカス学会役員である。大学冬の時代にあって、これらの専任予定者の方々は、アメリカス研究と新専攻設置の両方に奮闘中である。新専攻を無事に出港させ、大学の存続・発展で足元を固めて充実した研究に従事したいものである。

#### 統合的視野

以上のごとく振り返った歴史の視点に加え、新専攻の船出にはアメリカス学会の学際的視野と広域をカバーする統合的視野を活かせないものかと思う。周知のごとくスペイン語母語話者の数は多く、国際学部外国語科英米語専攻の領域である米国にも多い。特に南西部には人口が集中し、地域によってはスペイン語圏と言いたくなるほどである。カリフォルニア州ではすでにヒスパニック系人口は白人人口を上回り、後者の36.6%に対し40.8%である。ヒスパニック系人口の増加は全米中でみられ、米国の総人口に占める比率は2000年の12.5%から2011年には16.7%に拡大した。在籍学生の中から米国のヒスパニック系住民研究に関心を持つ学生が現れ、またスペイン語の力を活かして米国で活躍する学生が現れると頼もしい限りである。

大学教員の研究環境は厳しくなりつつあり、そうした中で研究業績を挙げなければならないせいか、長い歴史的文脈を押さえ、広い視野にたって行う統合的研究は数少ないように思われる。それでも、筆者が最も力を入れてきたアメリカ日系人戦時強制収容研究の関連でも、想像力を掻き立て刺激を与えてくれる統合的研究がいくつかある。一つは、アジア太平洋研究を専門とする近現代史家T・フジタニによる朝鮮人日本軍兵士と日系人米軍兵士の体験を比較し、その歴史的意味を考察した刺激的な研究である。〔T. Fujitani, *Race for Empire: Koreans as Japanese and Japanese as Americans during World War II* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2011)〕。もう一つの注目したい研究はアメリカ日系人戦時強制収容事件をニューディール政策の文脈で読み解こうとするニューディール研究のアメリカ史家、ジェイソン・スコット・スミスの研究である〔Jason Scott Smith, "New Deal Public Works at War: The WPA and Japanese Internment," *Pacific Historical Review* 72:1 (February 2003): 63-92.〕。この研究は米国一国の視点に限定はされるものの、従来の研究には、アメリカ日系人戦時強制収容事件とニューディール政策を同じ歴史的文脈で読み解こうとする統合的研究がほとんどなかったことから画期的である。

(天理大学国際学部長・天理大学アメリカス学会副会長)

## 文学の中のアメリカ生活誌 (62)

新井 正一郎

Georgia (ジョージア州) 1660年代にさかのぼるイギリスの王領植民地カロライナは、バルバトス(英領カリブ海諸島のひとつ)の黒人奴隷労働への依存と主要輸出作物(砂糖)の増加とで驚くほどの速さで発展し、1715年までにはその境界線をサヴァンナ川の南方、もしくは奥地に到る、今日のジョージア州まで拡大した。当時カロライナとスペイン領フロリダ地方との境界地域にはヤマセ族というアメリカ原住民が暮らしていたので、カロライナ開拓民の領域の扉を奥地へ押し広げようとする動きは彼等の反撥を買った。やがて彼等はフロリダのスペイン人の助けをかりて、開拓者を襲いはじめた。しかしカロライナ開拓者はすぐに攻勢に出て、1715年の早い時期にはヤナセ族を一掃し、砦を築いて制圧した地帯を封鎖した。かかるイギリス植民地人の領域拡大の行動は、スペイン人を怒らせ、2年後にはもうカロライナ植民地の未開地帯で、スペイン人とイギリス人との間に武力衝突が起きていた。

カロライナ開拓者からの度重なる要請により、イギリス政府がフロリダからのスペインの進出を防ぐアメリカにおける最初の行動として、カロライナ植民地とフロリダとの間の辺境地方に緩衝地帯をつくらうとしていた頃、軍人で裕福な国会議員であったジェイムズ・オーグルソープと彼を支持する他のイギリスの博愛主義者たちが会合を開いていた。彼等はその危険な場所を、借金を払えずに刑務所に収容された人々や迫害された新教徒たちの避難所とし、サウス・カロライナから以北に建設されたイギリス植民地を守ろうとした。イギリス国王ジョージ2世はフロリダからのスペイン人の侵略の波を抗しようという強い意欲をもっていたので、ジョージア設立の特許状を出した。1733年、オーグルソープは自ら総督となって120人の移民をともない、サヴァンナ川近くに植民した。そしてその土地を国王の名Georgeと'ia'(ラテン語の地名接尾語)を組み合わせでGeorgia(ジョージ王の土地)と命名した。新植民地の管理にあたったオーグルソープたちは負債者や宗教的な迫害者を受け入れるだけでなく、諸民族の混合によって成り立つ模範的な植民地をつくりたいという思いから莫大な資金を投じて「新植民地の良い港と安い肥沃な土地は入植者に究極的な報酬を約束する」と喧伝した結果、イギリス人のほか、ドイツ人、フランス人、相当数のスコットランド高地人などが移住してきた。オーグルソープたちは入植者が立派なキリスト教信者になるよう、彼等の日常生活をこまごました点まで厳しく律した。飲酒を禁じ、奴隷禁止法によって入植者が保有できる土地の広さを限定し、作物の栽培、植え付けの時期に関しても規制をつくった。

ところがオーグルソープたちのユートピア的な計画の前には、過酷な現実があった。隣接のサウスカロライナがプランテーション制度、つまり奴隷労働に依存する米、藍、砂糖などの栽培と輸出によって繁栄していたため、ジョージアの比較的強い思いを持つ入植者はオーグルソープの規制を無視しただけでなく、サウスカロライナへ移っていったのだ。ジョージアの議会は1750年に人口の流出を抑える目的で、奴隷禁止法を撤廃、次いで禁じていた飲酒を公認したが、人口の減少は止まらなかった。オーグルソープのユートピア的企ては実現しなかった。1752年、彼はジョージア設立の特許状を国王に返還し、失意のうちに帰国した。しかし彼のもう1つの企て、すなわちジョージア植民地を緩衝地帯にすることは実現した。オーグルソープの領主時代の1739年に「ジェンキ

ンズの耳戦争」(イギリスの商船のジェンキンズという密輸業者がフランス海軍大佐に船を乗っ取られたうえ、耳を切り落とされたといギリス議会で証言したことが因となったスペインを巻き込んだ3番目の英仏抗争で、アメリカではジョージ王の戦争と呼ばれる)が起こると、彼はジョージアに導入した数百名の植民地民兵、それにスペインと仲違いをしていた周囲のインディアン部族を率い、フロリダのスペイン軍の要塞を占領した後、セント・オーガスティンまで進軍し、1742年には4倍の兵力を持つスペイン軍をブラッディ・マーシュで撃退し、サウスカロライナとジョージアを占領するというスペイン国王の野望を完全に打ち砕いたのである。それから11年後の1753年、ジョージアはイギリスの直轄植民地となり、独立戦争期間中には大陸軍を支援したことで、1788年に4番目の州として合衆国に加わった。独立戦争後この州は南東部の州とともに奴隷制にもとづく綿花王国として急成長していたために、1860年の大統領選挙で、新領土における奴隷制に反対する共和党候補のリンカーンが勝利すると、州の人々の感情は連邦からの脱退に固まることになる。ジョージア州が南部連合に加わったのは、1860年2月15日である。

1861年から4年にわたり、アメリカ南部の2つの戦場(東部戦線と西部戦線)で行われた最初の近代戦争といわれる南北戦争は、武器、人口、富、産業資源においてははるかに勝っていた北軍の勝利で終わった。南軍の戦死者は約26万人であった。復員した南部の白人兵士たちは、自分たちの存亡を賭けて戦った南部という異質の文化を抱えたアメリカー広大な綿花畑、ギリシャ風のレンガ造りの農園主の大邸宅、優雅な貴族的文化などが戦禍を受けて破壊されてしまっているのを目のあたりにし、消沈し、不安にさいなまれていた。こうした南北戦争と戦後の時代は、アメリカの作家たち、たとえばラルフ・ウォルドー・エマソン、ウォルト・ホイットマン、ステイーヴン・クレインなどの作品に描かれている。だがこれらの北部の作家たちの作品を読んで思うのは、自分たちの領土内でこの戦争を経験しなければならなかった南部の人(作家)と違って、彼等はこの戦いを理想的な青年たちの高踏的な夢をみたく企てと見ていた傾きがある。これに対しジョージア州アトランタ出身のマーガレット・ミッチェル(1900～1949)が著したシャーマン将軍の軍隊によって根こそぎ破壊されてしまったアトランタを舞台とした『風とともに去りぬ』(1939年)は、南部の人々がこの戦争から受けとったものの意味を示している作品といえるだろう。小説のテーマである一元的なロマンチストというイメージで登場する主役の大農園主の娘スカーレットの自己転換は、シャーマン将軍の遂行した一事件すなわちアトランタの焼き討ちなしには生まれるはずのないものである。そしてそのスカーレットは、北軍や carpetbaggers(「旅行鞆一つ持って利権を求めて南部に入りこんでいた連中」)のアトランタへの侵入に抗して、愛着がある郷里タラを守ろうとするだけでなく、タラが荒廃しても、「明日考えましょう……なんとか耐えられます」と訴えはじめるのだ。終章でのこの彼女の言葉が『風とともに去りぬ』の山場である。その窮極にあるのは、彼女がつかみとった不屈なアメリカ精神に対する作者の敬愛のまなざしであろう。

(天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長)

## 【アメリカス学会定例研究会・発表要旨①】

## 現代ブラジルの言語状況

## 一形態・統語論的バリエーションを中心に一

鳥居 玲奈

## 1. はじめに

いかなる言語にも多様な変種が存在し、それはポルトガル語も例外ではない。とりわけ地域変種に着目すると、ヨーロッパのポルトガル語（以下EP）とブラジルのポルトガル語（以下BP）には、音声・音韻面と語彙面において際立った差異が認められることは周知の事実である。

しかし、この発音と語彙上の相違に加えて、両変種には、文法の中核をなす形態・統語面においても比較的顕著な相違が存在している。

本報告では紙幅の都合上、前置詞と目的格代名詞の差異に絞り、BPに特徴的なバリエーションについてみていくことにする。

## 2. 往来発着の動詞と共起する前置詞 em

ir (行く), chegar (到着する), vir (来る) といった往来発着を表す動詞には、規範的には前置詞 “a” (または動詞によっては “para”) が用いられるとされている。EPでは、口語であろうと文語であろうと、規範通りの使用が確認される。一方、BPでは、規範的には誤用だとされる前置詞 “em” が用いられることがあり、とりわけそれが日常会話では高い頻度で観察される。

Bagno (2001)<sup>1</sup> は、BPで往来発着動詞と前置詞 “em” が共起する理由を、以下の2点に要約している。1点目は、発音上の問題である。EPでは、前置詞 “a” と前置詞 “a” と定冠詞 (女性単数形) が結合した “a” では発音上区別をするのに対し、BPではいずれも開口音となり発音上では区別ができない。そのため、BPでは、前置詞 “a” の使用は、話し言葉では回避され、それ以外の前置詞が好んで用いられる傾向にあるという。もう1点は、意味上の問題である。BPでは、往来発着の動詞と共起する前置詞は、後続する名詞の意味素性によって決まる傾向がある。つまり、前置詞 “em” は、前置詞 “a” や “para” の単なる代替手段として用いられるのではなく、これらの前置詞と意味的に区別され得るのである。例えば、映画館やサッカーのスタジアムのように、閉じた空間や限定された空間に対しては前置詞 “em” が用いられる傾向があるのに対し、比較的開いた空間や限定されてい

ない空間に対しては “para” が頻繁に用いられる。また、両者とも、とりわけ口語で頻出するが、前置詞 “a” は文語で用いられる傾向が高い<sup>2</sup>。

## 3. 目的格代名詞としての主格代名詞の使用

ポルトガルで、Conheço-o. (私は彼を知っている) という場合に、ブラジルでは、以下の3通りの方法がある。

(1) Conheço-o.

(2) Conheço Ø.

(3) Conheço ele.

(1) は、目的格代名詞 “o” を用いる形で、規範文法書では唯一正しいとされる形である。(3) は、主格代名詞の “ele” を目的格代名詞として使用している用例であり、規範文法書では誤用だとされる形であるものの、親しい友人同士や家族との会話では高い頻度で使用される。最後に (2) の “Ø” は、目的語が自明である場合に省略されることを表し、BPのみならず、EPにおいても、口語、文語ともに幅広く用いられているバリエーションである。しかしながら、この目的語の省略については、規範文法書や語学教材で取り上げられることはほとんどない。

これらのバリエーションは、かなりあらたまった場面や文語では (1)、くだけた場面は (3)、そして、(1) や (3) を回避するための中間的な選択肢として (2) といった、それぞれ異なる役割を担うバリエーションが存在しているのである。

## 4. おわりに

このように、BPにおける形態・統語論的バリエーションは、いずれかが正用でその他が誤用といった単純な正誤判断の対象になるようなものではなく、言語使用域や社会変種などとも密接に関連したバリエーションであるとともに、BPの多様性を示唆するものであると言える。

1. BAGNO, Marcos. *Português ou brasileiro – um convite à pesquisa*. São Paulo: Parábola Editorial, 2001.

2. MOLLICA, Maria Cecília. “A regência verbal do verbo ir em movimento”. In: OLIVEIRA E SILVA, Giselle M.; SCHERE, Maria Marta P. (Orgs.). *Padrões sociolinguísticos*. Rio de Janeiro: Tempo Brasileiro, 1996.

## 【アメリカス学会定例研究会・発表要旨②】

### ニューヨークにおけるキュビズムの受容と芸術教育 村山 にな

ニューヨークにおける1910年代から1920年代にかけてのキュビズムの受容を通して、フランスの前衛芸術から脱却した芸術表現の構築と当時の革新しつつある芸術教育の一側面を考察する。北米の初期モダニズムの作家や芸術家たちは、キュビズムの解釈や評論の根底にある象徴主義や「四次元」に代表されるフランスの抽象的な理論(theory)に背を向けた。一方、より実践・直接的(pragmatic)で、客観的な視座で地域の題材、例えば、機械の幾何学的な構造美、鮮明に被写体を投影する写真画像、高くそびえる摩天楼や橋のデザインなどに焦点をあてた作品に取り組んでいた。同様に芸術教育の分野では、日本美術に造詣が深いアーネスト・フェノロサとアーサー・W. ダウが、フランスの理論重視と写実様式の美術教育を否定し、新しい美術教育理論と実践方法の普及につとめていた。

フランス在住のピカソとブラックによって始まったキュビズムは、モダンアートに革新をもたらし、世界的なアートムーブメントに発展した。フランス民族博物館は1878年に設立され、当時のフランス植民地から土着文化を象徴的に表現した作品が展示されており、ピカソの《アビニョンの娘たち》1907年は、土俗的なお面の抽象形体を彷彿とさせる。また、女性の身体表現には従来の「美」の観念は該当せず、画面上に描かれた人物と背景の境目がもはや崩壊しており、陰影によって部分的に立体的なかたちが浮かび上がるようであっても不確かで、確固とした構造体としての身体を画面上に把握することは不可能である。

1913年2月17日から3月15日に開催されたアーモリーショーは、ヨーロッパにおけるモダンアートの動向を、北米の一般大衆に展示公開した。マンハッタンのレキシントン街のNational Guard's 69th Regimentを会場とした。キュ

ビズムの中でも、フランシス・ピカビアとマルセル・デュシャンの作品の方がピカソとブラックよりも有名になった。デュシャンのはじめてのニューヨーク滞在期間となった1915年から1919年にかけて作られた主要な作品は《大ガラス》で、ガラスという古くて新しい、工業製品とも神秘的な工芸作品ともとれる素材を用いることによって、伝統的な油絵とは一線を画している。《大ガラス》には、機械の図柄が示されているが、その仕組みやはたらきは自身による解説があるものの不可解であり、デュシャンは機械を社会の進歩と発展の象徴として肯定的には用いておらず、彼が表現する機械の構造や機能は、不合理、偶然、性交渉といった科学と理性、効率性とは正反対の意味合いを隠喩しており、北米の機械産業と文明を讃えるよりもむしろ皮肉が込められている。しかし、当時のニューヨークの作家にとって、デュシャンやピカビアによる滑稽な機械表現は、近代社会への痛烈な批判とは映らなかった。芸術家たちが集ったアレンズバーグ・サークルに属していた作家たち、例えばシャンバーグ、シーラー、ステラ、デムース、コヴァートらは、デュシャンの《大ガラス》の最新の機械製品のような線的で鋭敏な表現から少なからず影響をうけた。チャールズ・シーラーはデュシャンのことを「正確な制作者」“precision instrument”と形容し、《大ガラス》の仕上がりの完成度と技術性の高さを評価し、「目がとらえた秩序を、実現できる工芸手腕」と美的側面から高評価している。

機械美学 machine aesthetic すなわち、シーラーのコメントにあるような機械特有の幾何学形体の機能美に由来するデザイン性と素材の先端性を美的に鑑賞する対象とする態度は、当時のニューヨークを中心とする都市文化のアイデンティティーを投影していた。戦後、キュビズムは1910年代の戦前の前衛芸術として捉えられ、1920年代に入るとその新規性がなくなり、ピカソ自身も具象的な様式に移行したこともあり、キュビズムは過去の流行という印象をもち始めた。キュビズムのおかげで写実模写から

脱する表現の可能性が広がったことを肯定的に受けとめる議論がある一方で、キュビズムは観念的理論に傾倒し過ぎて現実からかけ離れているとの批判があり、キュビズムの受容は、否定と肯定の両極端を呈していた。

美術教育の分野では、アーサー・ウェズリー・ダウが、新しい抽象表現の創造を目指しており、フランスの美術学校の指導要綱の学芸教育理論 (academic theory) に反旗をひるがえしていた。ダウは、1904年よりコロンビア大学のティーチャーズカレッジの教授であり、1884年から5年間のフランスへの留学を経験していた。帰国後、ダウは、フランスの美術学校の学芸教育理論中心の教授法の限界に気づき、新しい美術教育と表現の方法論を模索する中で、ボストン美術館の学芸員を勤めていたアーネスト・フェノロサから東洋美術を学んだ。ダウとフェノロサは日本美術から着想を得て新しい美術教育を標榜することで目標を共有していた。フェノロサとダウが考えた新しい美術教育のはたらきとは社会的な広がりを持ち、都市環境デザインの美化へとも連なっている。両者ともに、教育を通じた人の成長と発展に絶対的な信頼を置き、創造力を養う感性教育を推奨した。フェノロサの写実表現への批判と美術の本質論は、1899年に東京で記された「美術の美術たる根本は、外形にあらざるなり」そして「美術の根本たるべきものは、其精神的なるに存す」という言葉に集約されるであろう。

ダウの提唱した絵画のなかの「構図」の発想には、東洋的な感性が込められていた。例えば、岡倉天心の『茶の湯』(Book of Tea)にある禅の哲学では、左右対称であることはつまらないと避けていることを引用して、微妙な構図のあり方を著書で指導している。ダウはこのデザイン理論を分け隔てなく、絵画、版画、写真、陶器などのあらゆる視覚表現媒体に適用することで、芸術と日常生活をつなぐことを実践することで、社会、人々の暮らしのなかで生きる芸術のあり方を示した教育者として、北米のモダンアートを切り開いていった学生たちと美術教師

たちの共感を呼び、影響力を発揮した。身近なデザインという発想が抽象芸術表現への架け橋となった。

キュビズムに影響を受けたニューヨークの作家たちは、写真映像という機械を用い、都市デザインを被写体として独自に新表現を試みた《マンハッタ》1921年。当時の批評家マウリス・デ・ザヤスは、主観ではなく客観性を強調した写真は、芸術の頂点にあると断言し「シーラーがキュビズは自然界にあり、写真がそれを捉えることができる」と証明した」と高評価した。つまり、キュビズムとは、カメラという先端技術が身体化し、革新的な見方を得た近代文明人の証として掌握された。ニューヨークの街そのものが、立体・幾何学形体が織りなすキュビズム世界だったのだ。このような評論は、当時の芸術家たちが、現実の社会のなかで普遍的なかたちを観るために近代技術を身体化していたことが示唆されている。そして、かたちが極端に簡素化されたシーラーの絵画はとてもアメリカ的だと評価された。つまり、フランスの画家が「理論によって描く」のに対して米国の画家は、対象物の本質の特徴を観ぬくことができるプラグマティックな態度が備わっていると肯定的に受けとめられた。

当時を代表する芸術家と教育者であったシーラーとダウは、両者とも日常生活のなかから題材を抽出することと、抽象的な理論 (theory) を退けて、実際に見たことに基づくデザイン感性を重視したところで一致している。双方とも、フランスのモダンアート・キュビズムを受容する際、抽象的な理論に傾倒せずに、直接的に対象物を観る力を培い、日常で得たデザイン感性を磨くことを己の芸術表現の基盤とした。フェノロサとダウによって、北米において20世紀前半に新しい美術教育が普及していき、キュビズムを受容する素地が学生たちに育まれていったと言えよう。そのなかで、対象物に対峙し、率直に観て感ずる感性とそれをデザイン表現する実践主義にニューヨークに展開した初期モダニズムの都市文明遺伝子が見いだせる。

(玉川大学芸術学部准教授)

## お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる 11 月 29 日（土）12:30 から天理大学ふるさと会館 1 階会議室において、「第 19 回年次大会」を開催します。学会誌『アメリカス研究』第 19 号は『アメリカスのまなざし—再魔術化する観光—』と題する単行本形式（天理大学出版部）で刊行予定です。大会当日に会員のみなさまに配布させていただくべく、もっか編集作業を急ピッチで進めております。お楽しみにご来場ください。なお、大会プログラムは次のとおりです。

＜総会＞ 12:30 ～

＜講演 1＞ 13:20 ～ 14:50

村山元英（千葉大学名誉教授）「ユダヤ系アメリカ経営者の起源とその進化について」

＜講演 2＞ 15:10 ～ 16:30

河野彰（大阪大学名誉教授）「人の移動とことばの移動—借用語について考える—」

本年度は、講演を 2 つというぜいたくな企画となりました。結婚披露宴における新郎側の主賓と新婦側の主賓で 2 名という具合にご理解いただければ、華やいだ気持ちで年次大会にご参加いただけることと存じます。

ご講演をしていただく村山元英先生は、米国コロンビア大学を経て、米国シートンホール大学院修了後、米国において国際企業の経営相談業務の実務を経験。このことにより国際経営学の体系化を急務とし研究者（大学教員）としての歩みを開始されました。ご業績・活動は多岐にわたりとても紹介しきれませんので、AMAZON や Google の検索に委ねます。

2 人目のご講演者の河野彰先生は、1979 年、旧大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）にポルトガル・ブラジル語学科が設立されて以来、今日まで 35 年間、教鞭をとってこられた、わが国におけるポルトガル語教育の功労者です。近年では「出稼ぎ現象」によるポルトガル語と

日本語の言語接触を研究テーマとされており、その結果生じる「借用語」の諸相について興味深いお話がうかがえるものと思います。

なお年次大会には、会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々の来場も歓迎します。入場は無料です。

## アメリカス学会新会員紹介

村山にな（2 月）古川義一（5 月）柴田修子（6 月）

## 編集後記

夏目漱石連載 100 周年ということで『こころ』につづき『三四郎』が朝日新聞で再連載されています。懐かしく読み返しては、若き日を思い出しておられる方もいらっしゃることでしょう。とはいえ、ゆっくり文学作品を楽しむゆとりがないほど多忙なのが大学の実情です。このような「逆風」のなか、巻頭言の山倉先生は統合的視野を失わないようにしたいものだ、とおっしゃっています。形になりそうな小さなテーマに取り組みがちな我われには耳の痛いところですが。年次大会の両講演も我われを壮大な世界にいざなってくれそうな予感がします。ふるってご参加ください。

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000 円です（入会金はありません）。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニュースレター

(No. 71 : 2014 年 11 月 5 日発行)

発行者：矢持善和

〒632-8510 天理市杉之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax : 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>